

第8章までが野外で行われた実験だったのに対して、第9章以降は実験室で、ショウジョウバエや大腸菌といった主にモデル生物を用いた研究例が紹介されている。実験室における実験は、実際の生物の生息環境と条件が乖離してしまう一方で、実験区ごとのノイズを最大限減らすことができるという利点がある。また、多くのモデル生物の世代時間は短く、世代時間が長い生物と比べて、進化速度が速いという利点がある。これらの利点を活かし、レンスキーらはついに、もしX回繰り返したら進化は同じ方向に進むのか、という長期進化実験(LTEE)を始めるのであった。レンスキーらの研究により、進化は短期的には概ね同じ方向に進むが、極めて稀な偶然の連続によって生じる進化的跳躍によって、進化の方向性が大きく変化することを示した。

終章では、「ヒトの誕生は不可避だったのか？」と題し、進化の予測可能性とその限界に関して言及している。これらの進化の予測可能性に関する研究は、至近的には感染症や薬剤耐性菌の進化といった我々の社会生活に還元されうるだろう。そして究極的には、我々ヒトの誕生や存在を理解する上で、必要不可欠であるに違いない。

進化は、我々が生きる世界において、物理現象や化学反応と同様に、普遍かつ絶え間なく起きている現象である。本書を通じて進化研究の方法論を学び、進化という現象への理解を深めることは、我々の意思決定を行う上で、そんなに悪い話では無いように思う。



柿添翔太郎 かきぞえ しょうたろう

九州大学大学院生物資源環境科学府 昆虫学教室  
持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム 環境モジュール

1992年長崎県生まれ。九州大学理学部生物学科を卒業後、九州大学大学院システム生命科学府にて修士号を取得。専門は、昆虫綱マグソコガネ亜科の系統学および分類学。

## 自著紹介

### 『パリの景観保全— 「ピトレスク」をめぐる—』

木岡伸夫編『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ 都市の風土学 12 講』

江口久美 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

本稿は、江口久美(2019)「パリの景観保全—「ピトレスク」をめぐる—」木岡伸夫編『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ 都市の風土学 12 講』, 萌書房, 107-120, 2019.10. より、適宜文章・図などを引用、抜粋、追記、修正などしたものである。

「花の都」パリの魅力を形づくるのは、新旧の要素が調和した都市景観である。単なる古さでもなく新しさでもないその魅力は、どこから来るものか。オスマンによる大改造以後の近代化の中で、「ピトレスク」が美の基準として市民に自覚され、景観保全の指標となっていく。本稿では、この「ピトレスク」という概念をめぐるパリの景観保全の取り組みを紹介する。

フランス語の「ピトレスク」(pittoresque)は、「注意を引き、絵に描きたいような固有の様相による魅力を有する」ことを意味する。パリの景観に対するこの語の使用は、英語の「ピクチャレスク」(picturesque)から持ち込まれたと考えることができる。英語のピクチャレスクの初出は1705年であり、「絵画の要素または品質をもつこと、景色が良いこと」などを意味していた。



図1：パリ改造で整備されたリヴォリ通り（2018）（筆者撮影）

しかし、その言葉の輸入は、単純な現象ではなかった。もともと、英語のピクチャレスクは、不規則な自然美を評価するための言葉であった。

このピクチャレスク概念がフランスで独自の進化を遂げるのは、19世紀になってからである。19世紀初頭、パリは古都でありながら近代化がうまく遂げられず、不衛生で過密な状態に陥っていた。それを象徴する出来事の一つが、1832年のコレラの大流行であった。1853年にセーヌ県知事となったオスマンは、パリを近代化すべく、パリ改造に着手した。パリ改造の目的は、プロジェクト事業として美観を取り入れた街路整備を行い、都市に機能性と合理性を獲得することであった。街路整備にはルネサンス＝バロック式の整列美が重視され、「対称性・直線を兼ね備えた広幅員街路とそのパースペクティブ上へのモニュメントの配置」が行われた（図1）。パースペクティブとは、眺望または眺望性を指す。この手法は、「オスマニズム」と呼ばれた。

こうしたオスマニズムはヨーロッパに広がったが、古い地区の急速で大規模な取り壊しを伴ったため、社会からの反発を招いた。オスマニズム以前の古きパリの保全活動の牙城となったのが、1897年にパリ市内部に設立された「古きパリ委員会」(Commission du vieux Paris)であった。彼らは、オスマニズムによる急速な近代化が進むパリにおいて、実際に町を歩き回り、パリ市民の享受する都市景観を発見すべく、撮影や記録を行った。そのうえで、ピトレスクであると評価した景観を、保全につなげる活動を行った。

特筆すべき活動を行っていた、建築家ルイ・ボニエ (Louis Bonnier: 1856-1946) により、ピトレスクであると評価された対象を分析した結果、ピトレスク概念は「多様性・構成・懐古性・自然・地方性・特異性」などを示すということが、明らかになった。

また、写真家ウジェーヌ・アジェ (Eugène Atget :1857-1927) による写真の分析を通じて（図2、3）、ピトレスクという概念は多様な含意を持ち、それまでのパリの景観に調和してパリの新しい魅力となるものであれば、新規の要素も含むことができる柔軟な概念へと、進化を遂げたのではないかと考えた。



図2：雑誌売店、モンパルナス駅とレンヌ広場（1898）  
 （出典：Laure Beaumont-Maillet. *Atget Paris*, HAZAN, 1998, p.473）



図3：シャルシュ＝ミディにて、シャルシュ＝ミディ通り19番地  
 （出典：Laure Beaumont-Maillet. *Atget Paris*, HAZAN, 1998, p.478）



図4：ビュット・オウ・カイユ地区（2018）（筆者撮影）

パリ市民の景観へのまなざしから生まれたピトレスク概念は、現在でもパリの景観保全の美の基準として息づいている。鳥海（2004）の挙げる例を見よう。13区に位置するビュット・オウ・カイユ地区は、低層の建物で構成され、緑が街路にこぼれ出す村落的な雰囲気や現在でも残している（図4）。



江口久美 えぐち くみ

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 総括チーム

1983年東京生まれ。2011年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。都市工学専門。フランスの町並み保全と合意形成、ギリシャの観光まちづくり、緋文化の学際的評価を研究対象としている。主な著書に、江口久美（2015）「パリの歴史的建造物保全」中央公論美術出版。